

第 11 章『リトル・ドリット』

内向する暴力——病的自傷者はなぜ生まれるのか

武井 暁子



ルーベンス『二人の殺人犯とともに十字架にかけられたキリスト』(1619-20)
『新約聖書』の「マタイ伝」「ルカ伝」の挿話を題材にした絵画。

『リトル・ドリット』のウエイド嬢は登場場面こそ少ないものの、彼女の陰気さ、不寛容、舌鋒の鋭さは強烈な印象を残す。殊に、彼女の告白がすべてを占める第二部第二章は「暗い小説 (dark novel)」と評されるこの作品の中でも、特に緊迫した箇所の一つだ。

第二部第二章が「ある自虐者の物語 (The History of a Self-Tormentor)」と名付けられており、ウエイド嬢が病的な心理状態にあるのはすでに明らかにもあるのか、その要因への詳細な分析は意外に少ない。エドモンド・ウィルソンはウエイド嬢を「神経症であり、そのために自分は決して愛されないという妄想に囚われている」としながらも、彼女の「妄想」の元凶である私生児としての出生は「単なる思考様式に過ぎない」と言う (E. Wilson 47)。マイケル・スレイターはウエイド嬢をハヴィシヤム嬢の前段階のような人物であり、ディケンズは読者が彼女の自虐癖を病的なものともるように意図すると述べるにとどまる (Slater 260, 265)。ジョン・ケアリは、ウエイド嬢を世間から隔離するものは彼女自身の傲慢と神経過敏であると言うが、それ以上の分析はしなく (Carey 116)。

ウエイド嬢の性向の一つとして、同性愛嗜好を見る研究者も多い。フィリップ・ホプスバウムは、ウエイド嬢は出生が原因で社会に冷遇されるという思いから、「無益でむかつくような同性愛」に逃避すると言う (Hobsbaum 210)。小池滋氏は、建前と本音の分裂を強いられる女性たちを隷属状態から救おう

とするウエイド嬢はウーマンリブの精神を先取りしているかに見えるが、実は彼女の行動の源は満たされぬ同性愛である、と指摘する (小池三四一)。アナマリ・ジェイゴスは、ウエイド嬢を二十世紀的な同性愛者の原点とするのは誤りであると言いつつ、彼女の同性愛嗜好を認め、家庭の天使でもなく、娼婦でもなく、ヴィクトリア朝の女性のステレオタイプから逸脱したその不可解さを論じる (Jagoes 423-5)。マーサ・ヴィスィナスはウエイド嬢のタティコラムを支配したい願望は回復不可能な偏執狂に起因すると分析する。テクストでは、ウエイド嬢が同性愛者であるとは一切断言されていないのだが、ディケンズの巧妙な書き方は、彼女の同性愛嗜好らしきものをあぶり出し文字のように浮かび上がらせる。

ウエイド嬢の自虐癖を従来とは別の視点から理解するために重要な役割を果たすが、彼女と一時同居する (そして同性愛関係にあったかもしれない) タティコラムだ。タティコラムは素性、成育歴、氣質等でウエイド嬢と酷似しており、ウエイド嬢の分身と思しき存在だが、批評の対象になることは少ない。しかし、第一部第二章から始まるタティコラムの自己打撃は現代の自傷行為の原型となりうるもので、彼女の情緒不安の表れであるとともに、成人したタティコラムと位置づけられるウエイド嬢の病的な精神状態をも映し出す。タティコラムの物語は、ウエイド嬢の告白では語られない少女期の自傷行為の物語でもあるのではないか。このように考えると、ウエイド嬢が執拗に自己を苛み、そして他者へも敵意を向けるプロセス

が見えてくる。² 本稿ではタテコイラムの自傷癖とウエイド嬢の攻撃性を関連付けて読み、自己への暴力が精神的破綻を誘発し、さらには他者への脅威となるプロセスと、自傷者を排除もしくは矯正するシステムを明らかにしたい。

第一節 病的自傷の定義

自傷と言う言葉を聞くと、反射的にリストカットを連想する読者が多からうが、自傷の多岐にわたる文化・歴史的背景を網羅した画期的な研究書との評価が高い、アルマンド・R・ファヴァツァ『自傷の文化精神医学——包囲された身体』（一九八七年）によると、自傷の基本的な定義は自殺を目的とせず、自己の身体を直接傷つける、もしくは他人に自分の身体を直接傷つけさせる行為ということになる。³ 広義の自傷行為を理解するため、基本的な定義と分類を説明したい。

自傷は、文化的には認められたもの（儀式、慣習、風俗等）と病的なもの二種類に分かれる。ファヴァツァの分類では文化的は認めを受けた自傷は身体の癒し、魂の救済、社会規範の維持と関係がある。具体例を挙げると、キリストの磔に見られるように、宗教者の殉教や苦行は万民を罪から救済するためである（本稿の扉絵参照）。儀式は健康増進、霊的パワーの獲得、病氣平癒、共同体の連帯感の形成、成年に達したことの証明を目的とすることが多く、地域性に富んでいる。例えば、オーストラリア先住民の尿道切断、タイプーサンと呼ばれるインドヒン

ズー教の祭（一月二〇日）でのピンや棒を舌や頬に刺す儀式などがある。タトウはもともと太平洋地域での古い風習で、地域ごとに違う意味を持ち、入れる箇所、年齢はまちまちだった。

現代精神医学の治療の対象となる自傷行為は病的なものに分類される。従来、自傷は自殺行為と混同されることが多く、自傷と自殺の相違が明らかになったのは一九七〇年代だ。自傷のわかりやすい定義ができたのは八〇年代になってからで、以後専門家がそれぞれに修正を繰り返している。例えば、ファヴァツァらの定義によると、自傷が自殺と違う点は、身体に痛みを伴うにもかかわらず、一時的にもせよ、精神的苦痛や身体的不快を伴う症状を軽減し、自傷者の癒しとなり、秩序の回復に貢献する役割があることだ。

病的自傷は身体に対する損傷が大きい順に重症型、常同型、中等度／表層型となる。ファヴァツァの分類に従い、それぞれの特徴を要約すると次のようになる。

重症型

突発的に発生し、深刻な身体損傷や大量の出血を伴う。体の部位（耳、指、生殖器等）の切断など。精神病患者、薬物中毒者に多い。

常同型

重症型と違い、単調に繰り返される。他者が見ている状況下で起こりやすい。ヘッドバンギング（頭部を打ちつける）、自己殴打、口部内損傷、眼球圧迫・刺傷、関節脱臼など。重度

の精神遅滞者に多い。
中等度／表層型

パーソナリティ障害と関連していることが多い。反復性、症状の程度に応じて次の三種類がある。

強迫性

日常的に何度も生じ、儀式的要素がある。精神的苦痛の解消、気分の高揚、自己コントロールを目的とする。抜毛、皮膚の擦傷、熱傷など。

挿話性

それなりの頻度で発症。強迫性と同様、精神的苦痛の解消、気分の高揚、自己コントロールを目的とする。摂食障害、アルコール・薬物依存症、統語失調症に付随するケースもある。

反復性

強迫性、挿話性に比べて、依存性が高く、自分の意志では抵抗できないほど行為に執着する。リストカットの他、常同型、強迫性と同じ症状もある。パーソナリティ障害の他、外傷後ストレス障害（PTSD）と併存することもある。

自傷の有名な実例の一つとして、ゴッホの左耳たぶ切断がある。ゴッホは一八八八年一〇月二三日からアルルでゴーギャンと同じ居し始めたが、次第に不仲となり、同年一二月二三日、ゴーギャンにカミソリで切りつけた後、ニックになり、行きつけの売春宿で左耳たぶを切断し、売春婦の一人に送った。一八八九年に



図版① ゴッホ『自画像』（1889）

この絵が描かれた1年半後、1890年7月29日にゴッホ死去。猟銃による自殺と考えられている。

描かれた自画像では左耳が包帯で覆われており、自傷の痕跡をとどめている（図版①）。このケースは重症型の典型例といえるだろう。

最後に自傷の反復性と依存性について説明しておきたい。先に、自殺と違い、自傷は一時的ではあるが、精神的苦痛や身体的不快を伴う症状を軽減し、自傷者の安堵、秩序を回復する手段となりうることを指摘した。しかし、現実には身体の痛みと引き換えの安寧は持続せず、自傷行為後は自己嫌悪と罪の意識を感じる人が多い。さらに深刻なのは、自傷の度合いがよって感情のコントロールができなくなり、自傷の度合いがエスカレートすることだ。そのため、自傷はアルコール・薬物依存と同様依存症であるとの見方をする専門家も多い。⁵

第二節 自傷の要因

フアヴァツアによる自傷の分類は、フアヴァツア自身も断っているように、百人いれば百通りの要因と症状が存在する。自傷をわかりやすく簡略化したものだ。重症型、常同型、中等度で共通の症状があり、他の精神障害が付随するケースも多い。すべてをタティコラムとウエイド嬢の分析に援用するのは不可能だが、タティコラムの一連の自傷行為は、環境と症状の点で、反復性自傷傾向と共通項を多く持つ。

反復性自傷者は、先に述べたように、自傷行為への依存度が高い。自傷を繰り返すことにより、身体組織の破壊、変形が起

こるケースもある。自傷の主な動機は、不安・緊張・怒り・孤独感の解消だ。環境的要因としては幼少期の虐待、病氣、感情表現やコントロールの困難さ、他人からの拒絶、孤独感、怒り、罪悪感が挙げられる。発生期は幼少期後期から青年期前期で、女性のほうに発生するケースが多い。パーソナリティ障害と結びつくことがある。

以上の特徴は、第一部第二章のタティコラムの言動をかたりの程度まで説明する。タティコラムは人前では取り澄ましすぎた態度だが、一人になると髪を振り乱し、泣きわめきながら唇をつねりあげる。唇だけではなく、首にもあざが残っているのは身体変形の種類と考えられよう。タティコラムが検疫拘留されていた間に二回自傷に及んだと語ることから、自傷行為の特徴である依存性がうかがわれる（彼女が平素頻繁に自傷していたであろうことは、容易に察しがつく）。自傷行為中の彼女の動作の一つ一つは、檻に閉じ込められた野性動物を思わせる。

タティコラムを自傷に駆り立てるのは、雇い主であるミーグルズ家に対する不満と怒りだ。彼女は強情ではあるが、孤児として生まれ、愛情を受けることなく育ったため、他者から拒絶されるのを恐れ、過剰にミーグルズ夫妻の愛情と関心を求める。それゆえ、彼女の怒りは一家から疎外されていること、次に一家の愛娘ベットの格差に向けられる。ウエイド嬢の下へ出奔してからも、タティコラムがミーグルズ家のことを気にかかけ、様子を見に行くのはミーグルズ家への断ち切れぬ執着が

なせるわざである。

次のタティココラムの語りには、ミーグルズ家への怒り↓悪い主への不敬に対する罪悪感↓矛盾した感情が引き起こす苦しみを解消するために自傷↓一時の落ち着きを得る、という自傷行為の典型的なプロセスが見てとられ、しかもそれが常習化していることがわかる。

「かっとなると、気が狂ったようになってしまうの。必死に努力さえすれば自分を抑えられることはわかってる。時に必死に努力するけれど、しない時も嫌な時もある。何を言ったのかしら。自分で言っていた時は、それが真っ赤な嘘だとわかってた。あの人たちは、あたしがいまだこかで面倒みてもらって、何不自由ないかと思ってるのよ。あの人たちはいつも親切だから、大好きなの。こんな恩知らずの人間に、あの人たちほど親切にしてくれる人はいないでしょうね。お願いだから、あっちへ行つて。あたしあなたがこわいのよ。かっとなると、自分で自分がこわいの。それと同じくらいあなたもこわいのよ。あっちへ行つて。お祈りをさせてちょうだい、泣いて、いい子でいさせてちょうだい！」(第一部第二章)

ディケンズの時代には、パーソナリティ障害という概念はまだ確立していなかったが、この語りには自我の分裂の兆候が見られる。彼女の中には、「ミーグルズ家に怒りをぶつける私」と「ミーグルズ家に感謝する私」が存在する。彼女の言い分を心

理的に説明すると、①本来の自分はミーグルズ家の召使の身分を甘受するいい娘である、②だが、かっとなると、ミーグルズ家に敵意を持つ恩知らずのもう一人の自分が出て来てしまふ、③そこで、自分をコントロールし、罰するために自傷に及ぶ、ということになる。タティココラムの自傷癖は、第一部第二七章で、ミーグルズ氏からウエイド嬢と縁を切るように迫られた時に見せる自らを引き裂くような仕草、そして、ウエイド嬢が少女時代にするように、「ずたずたに切り裂かれたほうがましだわ。自分で自分を切り刻んだ方がましだわ！」と自傷をほのめかすところにも表れる。ウエイド嬢の少女期については後段で論じる。

タティココラムの自傷には、自我の分裂とともにジェンダーの問題も見られる。例えば、ダスティ・ミラーの考察を要約すると、①女性は社会的に反撃を許されていないため、他人に対し攻撃的・暴力的な態度を取るより、攻撃や屈辱を甘受するほうが望ましいとされる ②そのため、女性のトラウマ経験者は虐待者になるより、自分自身に危害を加えるケースが多い ③一方、男性は社会から、他人からの攻撃や屈辱に甘んじるより、反撃することを是認されている ④ゆえに、トラウマ経験者の男性は自分がされたことをそのまま他人にやり返す傾向があり、幼児虐待経験者は長じてから配偶者や子供を虐待するケースが多い、ということになる。タティココラムがミーグルズ家の目を盗んで自傷行為に及ぶのは、おとなしく従順な女性が良い社会で、女性が他人に攻撃的態度を取るのとはまかりなら

ず、また身分の上からも、召使いが雇い主に刃向うことはもつてのほかだからだ。

自傷とジェンダーの密接な関係は、タティコラムとウエイド嬢の初対面の場面をテキスト冒頭のマルセイユの監獄の独房の描写と比較することではつきりと浮かび上がる。テキスト最初の二章は次のように、相似と反転が入り組んでいる。まず、監獄と監獄を想起させるホテルの一室の違いはあるが、双方とも狭く暗い空間である。そして、その場にいるのは男性同士、女性同士の違いはあるが、二人の人物であり、二組の同性同士の間に、それぞれ瞬時に上下関係が成立する。しかし、リゴーが格下のパプティストに過去の犯罪歴を吹聴し、何のてらいもなく他人を痛めつける喜びを口にするのに引き換え、タティコラムは彼女より年長で身分が高いウエイド嬢に雇い主への愛着と憎悪、自傷行為への弁明と罪悪感といった、矛盾した心情を涙ながらに吐露する。「目には目を、歯には歯を」が是認された犯罪者と是認されない若い小間使いは、手段の違いはあるものの、双方とも暴力という名前の「監獄」から抜け出せずにいるのだ。

では、タティコラムはなぜ自傷行為に及ぶのだろうか。彼女の成育環境を分析すると、トラウマを引き起こす条件がすべてそろっていることがわかる。まず、彼女は素性も定かでない私生児で、ずっと孤児院で育つ。目下の雇い主で保護者であるミーグルズ夫妻は善良ではあるものの、独善的で感情の細やかに欠け、タティコラムの訓育のため、彼らが信条とする「実際の」なことは何一つできない。次の引用から明らかのように、彼らは、タティコラムがペットとの格差に不満を持っていることを承知し、自傷を繰り返していることを察しているにもかかわらず、親馬鹿ぶりを吹聴する——「お母さんと自分は実際的な人間だからこそよくわかりますが、我々がペットにかまけているのを見て、あの子が荒んでいるように見えるときがあるのです。あの子にはかまけてくれるお父さんもお母さんもないから。かわいそうに」（第一部第十六章）。ライオネル・トリリングは『リトル・ドリット』の特徴の一つとして間違った、もしくは不適切な親が多く登場することを挙げ、その中にミーグルズ夫妻も含めている（Trilling xii）。タティコラムへの同情を口にしたがらも、ミーグルズ夫妻の本音は、中流階級の平穏な家庭生活への満足と、そのような生活から締め出されたものに対する優越感でしかない。ミーグルズ家、タティコラム、ウエイド嬢を結ぶ楔のような役目を果たすアーサー・クレナムは終始一貫ミーグルズ家の肩を持つのだが、客観的に見ると、ただでさえ感じやすい思春期の少女が、このような差別を日常受けていれば、安穩でいられるほうがむしろ不思議である。『オリヴァー・トゥイスト』で、ブラウンロー氏がオリヴァーの素性が判明する前から彼を可愛がり、最後は養子にするのに比べれば、ミーグルズ夫妻のタティコラムへの対応は不適切で、ネグレクトの一種である。

そもそも、タティコラムという命名は、ハリエット・ビードル（Harriet Beadle）という孤児院時代の呼称を、ハリエッ



図版② ウィリアム・ホガース『トマス・コーラム』(1740)

コーラムは海軍軍人として、前半生のほとんどをアメリカ合衆国に勤務した後、造船業で成功し、財をなした。彼が1741年に設立した捨て子養育院(The Foundling Hospital)は世界初の福祉法人といわれている。

ト↓ハティ(Hatty)↓タティ(Tatty)「ぼろ、みすぼらし」の意味)と簡略化し、孤児院の創設者トマス・コーラム(Thomas Coram, c. 1668-1751, 図版②)の姓を合わせた名である。パンプルによるオリヴァーの命名と同様、ミーグルズ氏はタティコーラムに、罪の子として生まれ、生涯他人から蔑まれる私生児であるとのレッテルを張っているわけで、精神的暴力に等しい。この命名がタティコーラムの不満や劣等感を掻き立てる要因の一つであり、ウエイド嬢がタティコーラムに接近する絶好のきっかけとなる。

第三節 ヤマアラシのジレンマ

タティコーラムという命名からもわかるように、ミーグルズ家が彼女のために「実際の」でよかれと思つてやることはすべて失敗する。それと対照的に、ウエイド嬢は「身体のどこかに病を持つ人が、同じ病の患者の解剖摘出を興味深く観察しているかのようにあつた」(第一部第二章、図版③)と描写されるように、タティコーラムの自傷の発作を自身のものであるかのように理解する。タティコーラムもまた、「あなたはあたしの怒り、あたしの悪意、あたしの——何て言えればいいのか——自分でもわからないけど——それと一緒に出来て来るみたい」と言い、ウエイド嬢の中に自分と同じ自傷傾向を見出す。つまり、二人は同じ病を共有する同士である。それにもかかわらず、最終的に二人が決裂するのはなぜかという点について、



図版③「同じ病の患者の観察」（第 1 部第 2 章、フィズの挿絵）
泣き崩れるタティコーラムと彼女を冷然と見下ろすウェイド嬢の位置関係は二人の上下関係を示す。

次に触れよう。

ウェイド嬢が抱える自傷傾向の要因については、第二部第二章の彼女の半生記によって明らかになる。彼女はタティコーラムと同様私生児として生まれ、物心つくころから周囲の大人や同年代の少女から敬遠されている。女性ばかりの空間で育つということも手伝って、怒りや苦痛を他人に向けることができないのはウェイド嬢も同じだ。

愛情を受けずに育ったため、ウェイド嬢は他人を不倶戴天の敵と見なし、常に孤独感や疎外感を感じている。少女時代、彼女が嫌うのは育ての親である「祖母」、寄宿学校の教師、同年代の少女たち、シャールロットの叔母である。長じてからは最初の奉公先の若く美しい令夫人、陽気で人がよい乳母、婚約者の従妹でもある十五歳の教え子、婚約者の叔母、そしてペットだ。年齢も社会的地位も異なるが、皆娘、妻、母として中産階級の幸福を当たり前のように享受するか、周囲の受けがよい人間ばかりだ。ウェイド嬢の行動の動機となるものは、自分の出自に対する劣等感もさることながら、自分が持たないものを持つている人間に対する嫉妬、そして自分をつまはじきにする中産階級への不満なのだ。

ウェイド嬢が呪文のように繰り返す「自分は馬鹿ではない」という口癖は他人から自分を守るための楯だ。しかし、その反動であろうか、一度誰かに好意を抱くとのめりこみ方が尋常ではない。彼女が自虐に陥る原因は好意を抱いた人間からの拒絶、もしくは裏切りである。ウェイド嬢は最初の手痛い経験を次の

ように述懐する。

私はその愚かな友を彼女には分不相応なくらい熱烈に愛したので、私はほんの小さな子供だったけど、彼女を思い出すたびに恥しい思いがする。その子はいわゆる愛すべき、愛情深い性格だった。周囲の皆に可愛らしい眼差しと笑顔をふりまくことができ、事実ふりまいていた。彼女が私を傷つけ、口惜しげらげようと、わざとそうしていたことに気づいた者は、私以外には一人もいなかったと思う。

にもかかわらず、私はこの不実の友をとて愛したので、私の生活は彼女への愛情ゆえにひどい嵐となった。彼女を「いじめた」という理由で——つまり、彼女のちよつとした不実を責め、私にはあなたの心が読めたといつては彼女を泣かせたことであるが——始終説教され、罰を受けた。

(前略) 彼女の計画は親族皆に彼女を好きにさせ——そのために私を嫉妬で身を焦がさんばかりにさせることだった。全員に対して親しく仲よさそうにして——羨望で私を狂わんばかりにさせることだった。夜寢室で二人だけになると、私にはあなたの卑劣さはお見通しよ、といつて彼女を責めたものだった。すると彼女はさめざめと泣いて、あなたは残酷ねと訴えた。すると、私は朝まで彼女を抱きしめ、昔と同じように彼女を愛し、こんなに苦しむのなら、いつそ彼女を抱きしめたまま川の底に飛び込んで——二人とも死んでしまった後までも彼女を抱きしめたままでもいい、と思つたことがしばしばあった。(第一部第

二二章)

ウエイド嬢はこの時代初めだが、この語りには自分の想いに応えてくれない相手に対する恨み、嘆き、執着、束縛に満ち満ちており、大人と見紛うばかりだ。繰り返し使われる「愛した(Loved)」という表現はまぎれもなくセクシャルな意味合いを含んでいる。ウエイド嬢の言動は周囲の大人の目にはいかにも常軌を逸したものに見え、罰の対象になるのも無理からぬことである。

もつとも、ウエイド嬢の陰気で何事も思いつめる性格を考慮すると、ウエイド嬢とシャーロットの友情(もどきのもの)は、ウエイド嬢の一方的な思い込みなのかもしれない。しかし、シャーロットをウエイド嬢の餌食になった純真無垢な乙女と考えるのは誤りである。ウエイド嬢と対照的に、シャーロットは人好きがする大人受けの良い子で、周囲の支持と同情を得る術を心得ているからだ。ブレンダ・エアズは、シャーロットはヴィクトリア朝の理想的な少女像の典型で、微笑と涙という女のらしい習性を使ってほしいものを手に入れることを知っていると述べるが(Ayres 91)、実のところ、シャーロットは大人に媚びるずるさを持つているというほうがふさわしい。「気の毒な性格(unhappy temper)」という、大人たちがウエイド嬢を排除する常套句を使い、巧妙にウエイド嬢を非難し、自己弁護をするシャーロットに対し、ウエイド嬢は反撃する言葉を持たない。

先に述べたように、自傷は感情のコントロールができない人間が感情の整理をするために行う行為である。シャーロットの「裏切り」を知ると、ウエイド嬢は自傷行為には及ばないが、「家に帰らせてくれないと、一人で昼も夜も歩いて帰る！」（第二部第二章）と自己の肉体を痛めつけることをほのめかし、せめてもの腹いせをする。帰宅後は、育ての親に、別の学校にやってくれないと、「暖炉に飛び込んで目を焼いてしまおう」と自傷をほのめかし、自分の要求を受け入れさせろ。ここでのウエイド嬢の言動は、彼女がタティコラムのように人目を忍んで自傷を繰り返していたことを示唆するとともに、立場が弱い人間にとつては、自らの肉体を痛めつけるより、他人に自傷の意図を通告するほうがはるかに有効な武器になりうることを理解したと解釈できる。以後、ウエイド嬢の自傷行為は極度の自己憐憫と自己嫌悪へと姿を変える。

とはいえ、成人してからのウエイド嬢の婚約から破談に至るまでの過程を見ると、彼女は少女時代と同じ失敗を繰り返していることがわかる。ウエイド嬢は美貌の持ち主であることから、条件のよい男性と婚約にこぎつけ、自分が嫉妬していた女性たちと同等になれるチャンスを得る。ところが、婚約者が彼女に好意や愛情を示せば示すほど、自分は美貌ゆえに買われた奴隷であると自嘲的に語り、彼女の唯一かつ最大の武器である美貌すら卑下する。それでいて、「自分は馬鹿ではない」との矜持に基づいて婚約者の気持ち冷める言動を繰り返す一方で、軽薄青年のガウワンに惹かれ、捨てられる。つまり、彼女は婚約

者を含め愚鈍と見なす人間を毛嫌いする反面、これと想つた人間には周囲の矚目を買うほどにのめり込み、手痛い目にあう。エアズは、ウエイド嬢は理想的な女性像に自分を合わせることを拒否しており、恋に落ち婚約したからといって、いかなる男性や家族にも自分を「買う」ことを認めないと言ふ（Ayes 91）。しかし、ウエイド嬢の婚約者への対応は独立心ではなく、人間不信に起因している。ガウワンに対する未練を依然トラウマとして抱えており、ペットとガウワンを憎み続けるウエイド嬢に、エアズが言うような毅然とした強さは見受けられない。

対人関係におけるウエイド嬢の両極端な傾向は、シヨーペンハウアー晩年の随想録として名高い『余禄と補遺』所収の寓話「ヤマアラシのジレンマ」を連想させる。寓話の内容は、寒さの中、二匹のヤマアラシが体を温めあおうとするが、相手の針で傷つくので近づけないというものだ。ウエイド嬢が気に入った数少ない人間は独占し束縛しなければ気が済まず、気に入らない大多数の人間は徹底的に遠ざけて不興を買う様は、まさに他の仲間と適切な距離を保つことができないヤマアラシと同じだ。ロンドンとカレーでのウエイド嬢の寓居がいずれも荒れ果てて、暗く、家具らしい家具もなく、周囲から隔絶しているのも、彼女の孤立と他人への不信を表すものだ。

第二部第二〇章で、睨みあうウエイド嬢とタティコラムの姿は、相手の針に触れないようにぎりぎりのところでバランスを取っているヤマアラシになぞらえられよう。ウエイド嬢は自分の分身のようなタティコラムとでさえ、円満な関係を築く

ことができなない。タティコラムが最終的にウエイド嬢を見限る理由は彼女の釈明によれば、良心の呵責である。しかし、道義的な理由もさることながら、「自分はとても惨めでした。いつも不幸で後悔していました。初めて会った時から、あの人のことをずっと恐れていました」(第二部第三章)というタティコラムの告白からも明らかのように、ウエイド嬢との別離を選択する切実な理由は、年若な彼女が常に緊張を強いられる拷問のような関係を続けることに耐えられなくなったからである。テクストには書かれないが、タティコラムに逃げられた後のウエイド嬢が、おそらく自分の「針」で自分を傷つけるであろうことは容易に想像がつく。

第四節 排除／矯正される自傷者

前段で論じたように、自傷行為は行為者にとって、精神的苦痛や身体的不快を解消し、安心感を得る手段となる。だが、フアヴァツツアは、現実問題として、自傷者のそのような心理状態は心身ともに「健全な」周囲の理解を得られず厄介者扱いをされるばかりか、自傷者の存在そのものが通常の人間の感覚を脅かすと言う⁸。この指摘はウエイド嬢とタティコラムに対する周囲の蔑視と警戒が奇妙に入り混じった態度を理解するうえで有用だ。

ウエイド嬢の自傷行為はほのめかされるだけであり、タティコラムの自傷行為はもっぱら密室で行われる。しかし、二人

の自傷癖の根本原因である激しい気性は「良識的な」周囲の間から常に監視・叱責・矯正の対象になってきた。ウエイド嬢は、少女期から「気の毒な性格 (unhappy temper)」(第二部第二章)と言われ続け、育ての親の「祖母」寄宿学校の教師、シャーロットの叔母、長じてからは婚約者の叔母から常に一挙手一投足を監視される。彼女の「きちつと結び、酷薄さすら漂う口許」(第一部第二章)はどんなに取り繕っても隠しきれない彼女の攻撃的な性格を物語る(リゴーが笑うと、口髭がずり上がり悪相になると似ていようか)。そのため、初対面の時から、ウエイド嬢はミーグルズ家に得体のしれない不気味さを感じさせる人物として認識されている。ペットはウエイド嬢を怖がり、ミーグルズ氏は、ウエイド嬢に「あなたは我々皆にとって、謎の人物で……我々の誰とも共通点は何一つありませんでした」(第一部第七章)と言う。ウエイド嬢はミーグルズ家に代表される穏健な中流階級の人間とは相いれず、監視され、排除されるべき人間なのだ。

一方、タティコラムの短気がかつとなりやすい気性はミーグルズ氏から常に「二五数えろ」と矯正を促される(図版④)。アナ・ウィルソンは、ミーグルズ氏のタティコラムの訓育は、ディケンズの時代、精神病患者に対する人道的治療として用いられたモラル・トリートメントに似ていると論じる(Anna Wilson 1933)。モラル・トリートメントでは患者の自尊心や他人に評価されたいという願望に働きかけ、自助努力を促すのが肝要だ。一方、ミーグルズ氏はタティコラムに常に低い身分



図版④「25 数えろ」（第1部第27章、フィズの挿絵）

昂然と頭を上げているウェイド嬢、狼狽した様子のミーグルズ氏、何もできず立ちつくすクレナムの対比が興味深い。

を思い知らせ、自尊心を傷つけることばかりしている。「タティコーラム」という本人にとつて犬猫の名と同然の屈辱的な名をつけ、怒りの発作を起こした彼女が落ち着くまで部屋に鍵をかけ、閉じ込める、などのミーグルズ氏の行動は、モラル・トリートメントどころか、野性の獣そっくりの彼女の自傷行為と相まって、手に負えない動物に対する懲罰を思わせる。文字通り、ペット(Pet)のような愛らしく従順な女性、そして夭折したペットの双子の妹リリー(Lily)の名が象徴する清純無垢な乙女を理想とするヴィクトリア朝中流階級にとつて、自らの処遇に不満を持ち、自傷/自虐に陥るウェイド嬢とタティコーラムは身の程知らずで、自らを社会の規格に合わせて恭順の意を示さないはみ出し者である。だからこそ、周囲の人間はウェイド嬢とタティコーラムを軽視しつつ、将来の災を恐れて、警戒・監視する。

第一部第二十七章でウェイド嬢・タティコーラムがミーグルズ氏やクレナムと対決する場面は、「異分子」である自傷者が自分たちを阻害する「健全」「实际的」な中産階級に戦いを挑む様相を呈している。ウェイド嬢の端正な美貌は健在で、しかも、終始冷静にミーグルズ家でタティコーラムが受けてきたネグレクトを自分のことのように供述し、ミーグルズ家の独善性を暴き出すとともに、嫌味たっぷりにはペットへの溺愛を攻撃する。一方、ミーグルズ氏とクレナムはウェイド嬢に最初から気圧されており、相手の情に訴えての弁解と自己正当化、今までタティコーラムの調教に常用してきた「25数えろ」を繰り返すこと

しかできない。ウエイド嬢は感情表現とコントロールができなかったため苦汁をなめてきたが、この場面でのウエイド嬢は過去に自分を屈服させてきた巧みな弁舌という武器を我がものに、世間の規範を何よりとする相手をねじ伏せる。

ウエイド嬢に負けたミーグルズ氏に残されたことはウエイド嬢を侮辱することしかない——「あなたがどのどなた様か存じませんが、心の内は腹黒い気性であることは、あなたも隠しませんし、絶対隠せません。もし、あなたが原因は何であれ同性の仲間を自分と同じように惨めにすることに、ひねくれた喜びを感じている女性だとしたら（自分もよる年波で、そうした例を聞いたことがあります）、あの子にはあなたに用心するように、あなたはご自分に用心なさるように警告しておきます」。アーサー・A・エイドリアンは、この場面で、ミーグルズ氏はウエイド嬢の同性愛嗜好を非難していると論じる（Adrian 93）。エイドリアンの指摘には、歴史的根拠がある。ヴィスィナスは、少なくとも一八四〇〜五〇年代のイングランド上流階級で女性の同性愛はゴシップの種になっていたと言い、一八六三年一月〜六六年九月まで継続した海軍提督ヘンリー・ジョン・コードリントンと妻ヘレンとの離婚訴訟¹⁰で、ヘレンの不倫とともに同性愛が争点になった事例を論じる。この裁判は『リトル・ドリット』執筆開始から八年以上経ってから始まったので、『リトル・ドリット』への影響はないが、ディケンズが女性の同性愛関連のスキヤンダルを耳にする機会があったのではないだろうか。

ミーグルズ氏の回りくどい物言いの他に、二人の同性愛関係

のほめかしはタティコラムの態度にも見られる。ウエイド嬢はタティコラムを手中に収めた時は勝利の喜びを表すが、タティコラムには最初からウエイド嬢との関係を楽しんでいる様子がまったくない。第一部第二十七章で、ウエイド嬢に手引きされてタティコラムがミーグルズ氏たちの前に出て来るときは、「半ば優柔不断な、半ば反抗的な」様子で、大嫌いなはずのミーグルズ家から解放された喜びは見られず、まるで罪人のようである。これは二人の関係が世間に憚られる類のものであったからではないだろうか。しかし、二人が仮に同性愛関係を結んだとしても、その関係は当初から危うさを秘めている。果たして、ウエイド嬢と暮らすうちにタティコラムはウエイド嬢の自虐癖と攻撃性を体得し、ミーグルズ家を持ち出してウエイド嬢を怒らせ、ウエイド嬢の奴隷と化した我が身をわざとらしく嘆く。周囲の圧力ではなく、自他を愛せない自傷者同士が当然の成り行きとして衝突することにより、二人の関係は破綻することがテクスト結末を読むまでもなく明らかだ。

テクストの終わりで、タティコラムはウエイド嬢の姿に自分の将来を見て取り、空恐ろしくなって過去の行いを悔い改め、ミーグルズ家に戻ることにしたと語る。ウエイド嬢とタティコラムの破局は、ミーグルズ氏が予見したように、いかな反抗的なタティコラムでも到底ウエイド嬢の敵ではないことと、二人だけの閉鎖的な空間に他人への暴力に喜びを感じるリゴーが加わり、ヤマアラシのジレンマが生み出した均衡が崩れたことにもよる。タティコラムがリゴーが不正に入手した

書類を持ち出すことによって、エイミとクレナムの結婚が可能になる。だが、「終わりよければすべてよし」に見えるこの展開はなぜか居心地の悪さを感じさせる。ブライアン・ローゼンバーグが指摘する通り、タティコラムが「半分喜び、半分絶望して、半分笑い、半分泣きながら」（第二部第三章）ミーグルズ夫妻の前に現れるのは、彼女の自傷の根本的原因である分裂した自我の名残である（B. Rosenberg 83）。タティコラムの帰還はウエイド嬢の下に出奔した時のように衝動的な行動で、彼女の中ではミーグルズ家に対する憎悪と執着の相克は未解決のままである。

* * * * *

タティコラムの「改心」は嫌がっていた屈辱的な名前と動物の調教もどきの「二五数えろ」の復活を意味し、ローゼンバーグが言う通り、いかにも自己卑下的である（B. Rosenberg 80）。エアズは、タティコラムがミーグルズ家で暮らしたければ自己を殺すしか道はない、と論じるが（Aries 9）、ディケンズ作品では、タティコラムはもとより、多くの女性たちが周囲に受け入れられることと引き換えに衝動や欲望を抑え、時には過度の犠牲や忍耐を強いられる。

タティコラムがまがりなりにも自己矯正をし始めたのに引き換え、ミーグルズ氏の態度はまったく変わらない。タティコラムの帰還後、ミーグルズ氏は「二五数えろ」の代わりに義務

を果たす重要性を説き、ロールモデルとしてエイミを挙げる。しかし、娘を甘やかし放題で中産階級の安定した生活に収まりかえっているミーグルズ氏が、エイミの労苦や献身をいくら説いても、外から見ればいかにもそらざらしい行為にしか映らない。この点については、デイヴィッド・ホルブルックの、ミーグルズ氏の説教は義務の美名のもとに女性に服従を強要するものでいやな気分になるというコメントが（Holbrook 118）、多くの読者の偽らざる感想であろう。ところが、タティコラムとエイミの邂逅はマーシャルシーでのほんの一瞬で、二人は一度も言葉を交わさない。二人の最初で最後の邂逅から、今後エイミとタティコラムは何の接点も持たず、従ってタティコラムは改心後も、エイミのような無私の献身をすることは到底できず、ミーグルズ氏の意に沿えないままという可能性を考えると、タティコラムの「改心」の持続性と自傷からの回復はあやふやなままテクストは終わる。

『リトル・ドリット』におけるウエイド嬢とタティコラムの自傷と自虐は成育環境と病的心理状態の因果関係のモデルケースになりうるもので、ディケンズの卓越した洞察力を物語る。しかし、例えば、パトリシア・インガムが「ディケンズ作品では、スキュートン夫人やジョー夫人のような女性らしくない女性の屈服・沈黙・破壊は通常の秩序を回復する上で、必須かつ楽しい一部分を提供する」と指摘するように（Ingam 80）、ディケンズ作品では基本的に家庭の天使の役割を担う資質を持つ女性が良しとされる。だからこそ、規範から外れた

自傷者はウエイド嬢のようにテクストから消されるか、タテイコラムのように矯正されなければならない。社会に受け入れられるために、義務を果たせという説教を独善的な俗物ミーグルズ氏の口から語らせるところが、テイケンズの諷刺であり皮肉であるとして、それをテイケンズの先見性と見るか、限界と見るかは自傷／自虐というテーマの枠をどう伸縮させるかによって、違ってくるのだ。

注

1 Martha Vicinus, "Lesbian Perversity and Victorian Marriage: The 1864 Codrington Divorce Trial." *Journal of British Studies* 36 (1997): 97.

2 従来、自傷を意味する専門用語として self-mutilation が使用されていたが、現在は切断以外のヘッドバンキング、バーニング（皮膚を火、薬品等で焼くこと）、抜毛、ピアシングなども含む、広義の self-injury, self-harm, deliberate self-injurious behavior などが使われてくる。

3 Armand R. Favazza, *Bodies under Siege: Self-Mutilation and Body Modification in Culture and Psychiatry*, 2nd ed. (Johns Hopkins UP, 1996). 以下、自傷に関する学術的考察の多くは同書に負う。なお、二〇〇九年、金剛出版から刊行の邦訳を参照した。

4 瀉血は体液のバランスを整えるものとして、ウィリアム・ハー

ヴィが一六二八年に血液循環説を唱えてから二世紀後の十九世紀中盤まで有効な医療行為と見なされた。また、古くは中国で行われていた纏足^{くわんそく}、さらにはアフリカ大陸での陰核切除も文化的是認を受けた自傷であるが、今日では人権侵害であるとの見方が強まっている。

5 例えび、Dusty Miller, *Women Who Hurt Themselves: A Book of Hope and Understanding* (1994; Cambridge MA: Basic, 2005). V. J. ターナー『自傷からの回復——隠された傷と向き合うとき』（小国綾子訳、みすず書房、二〇〇九年）など。

6 D. Miller 5-6.

7 「ヤマアラシのジレンマ」はフロイトが「集団心理学と自我の分析」(“Massenpsychologie und Ich-Analyse,” 1921) で引用し、レオポル・スラックが『ヤマアラシのジレンマ』(*Das Stachelschweindilemma*, 1970) で論じたことび、一般的に知られるようになる。ちなみに、アト・ド・プリース『イメーシ・シンボル辞典』(荒このみ他訳、大修館書店、一九八四年)による「ヤマアラシは盲目的な怒りの象徴である」。

8 ファヴァッツァ三八三〜八四頁。

9 モラル・トリートメントについては、例えび、Andrew T. Scull, “A Brilliant Career? John Conolly and Victorian Psychiatry,” *Victorian Studies* 27 (1984): 203-35; Andrew T. Scull, “Moral Treatment Reconsidered: Some Sociological Comments on an Episode in the History of British Psychiatry,” *Psychological Medicine* 9 (1979): 421-28 が詳しい。

10 Vicinus 70-98.